

# 各中学校代表の少年の主張を紹介します



先月号で玉村中学校の3人の主張をご紹介しましたが、今月号では南中学校の3人の主張をご紹介します。

(順不同、敬称略)

## 『親への感謝』

川上 優杏

私は母と2人暮らしです。小学4年生のころから2人で生活しています。私の家は他の家庭よりも裕福ではないと思います。でも、今もこうやって普通に生活できているのは、父の分まで働いてお金を稼いでくれる母のおかげです。私はそんな母にとっても感謝しています。しかし、最近友だちと話していると、「おかあさん、まじ、うるさい」という言葉を耳にすることがあります。それについて疑問を感じました。他にもニユースで子どもが親を殺してしまうという事件を最近よく見ます。自分を育ててくれた親の悪口を言ったり、殺害したりするのは絶対間違っていると思います。ただ、私も親の悪口を言ってしまった時期がありました。ケンカを

## 「いただきます」で伝わる思い

林 愛友里

「感謝の言葉」と言われたら、多くの人が「ありがと」を最初に思い浮かべるのではないのだろうか。だが、日本には、「ありがと」と同じように感謝の思いを伝えることのできる、素敵な言葉がある。「いただきます」だ。これは、日本ならではの言葉で、この言葉が一番好きな日本語だ、という外国人も少なくない。私も、この言葉によって、食に対する考え方が変わった。しかし、私はこの言葉を最近あまり聞かない気がする。「給食」という、給食センターから配送され「いただきます」ものを食べる機会があっても、それは変わらない。あなたは「いただきます」の意味をちゃんと知っているのだろうか。また、それを口に出すことができるのだろうか。

「いただきます」は、食事を作った人にもちろん、野菜を作った農家の人や、魚を捕った漁師の人、さらには配膳してくれた人にも感謝するための言葉だ。さらに、食事に携わった人だけでなく、動物や魚はもちろんのこと、

野菜などにも命があると考え、「その命を自分の命にさせていただく」という意味もある。これと同様に、「ごちそうさま」も、たくさんの人々に感謝するものだ。冒頭でも述べたが、食事の前にこのような感謝の言葉を言うのは日本だけで、他国では存在しない。だからこそ私は、この言葉を大切にしたいのだ。かくいう私も、「いただきます」とあまり口に出していなかった。私の家では「いただきます」という習慣がなかったのだ。私が小さいころは、家族がそれぞれ仕事や勉強などで食事の時間が違った。姉や兄は自分の部屋で食べることも多く、食事の場所まで違うときがあった。しかし、私だけはいつも、食事を作ってくれる母と一緒に食べていた。母と2人きり。そんなことはよくあった。しかしそれは、あまりにも静かな食卓だった。あるとき、そんな空気を断ち切ったかった私は、「いただきます」と言った。今まで、家ではあまり言ったことがなかったからか、母はとても喜んでくれた。たったそれだけのことだったが、母の笑顔が今でも忘れられない。言葉一つでこんなにも心が温かくなる。言葉で人の心を動かすという

のは、可能なのだと思った。今では、姉や兄が自立し、母と父と私3人の食卓が当たり前になったが、以来、私は「いただきます」とちゃんと言うようにしている。また、学校では国語の授業で、環境問題を題材とした説明文を読み取り、その際「飢餓」について学んだ。さらに、最近では九州で震災もあり、被災者の中には満足な食事がとれない人々がたくさんいる。食べられることは当たり前ではない。だから私たちは、「いただきます」という言葉をとおして、食べられるありがたみを、声にだして感謝することが必要なのではないだろうか。日本にしかない、食事の前の感謝の言葉。この伝統を私たちが伝えていく番なのだ。あなたは「いただきます」の意味を知っていただろうか。それを口に出せていただろうか。感謝の言葉は言う方も、言われた方もうれしいものだ。きつと、私たちが日々食べている食材たちも、「いただきます」という言葉で、喜んでくれるに違いない。たかが言葉一つ。されど言葉一つ。さあ言ってみよう感謝の言葉、「いただきます」。



## 祖母から学ぶ

横堀 舞

私の祖母は中学1年の秋に亡くなった。祖母を思い出すと、縁側で私を見て微笑んで座っている姿、ベッドで寝ている姿を思い出す。私は祖母が亡くなって学んだことがある。

私の祖母は昔、突然、脳の血管が切れ半身麻痺になった。それからは不自由な生活が続いた。ある日、家の段差で転び入院。1年間リハビリをしたが回復しなかったそうだ。私が物心ついたときには、祖母は施設での寝たきりの生活になり、話すこともできなくなっていた。手足はガリガリになり、むくみ、瞳は白っぽくかわっていた。

私は小学生のころは、2週間に一度、祖母に会いに行っていた。それが中学校に入ってから1カ月に一度になった。私は部活動などの慣れない環境で疲れていた。

その日は、中学1年の11月24日だった。午後3時ごろ、父が私に言った。「おばあちゃんの所に行くよ」。私は言った。「疲れたから行かない」。その日の夜11時ごろ、家の電話が鳴った。「様子が急変しました」施設からだっ

た。急いで車に乗り向かった。施設の人に案内された場所は霊安室だった。私は何度も自分に問いかけた。「なんで、今日おばあちゃんに会いに行かなかったのだろう」「なんで、もっと色々な話をしてあげられなかったのだろう」「なんで、ありがとりの一言が言えなかったのだろう」と。今さら「話したい」「気持ちいいを伝えたい」と思っても、もう祖母は帰ってこない。今までの私を振り返ってみると、自分自身の気持ちを伝えることをさけてきた。祖母の寝たきりの姿を見て勝手に「気持ちなど伝わるわけがない」と思ってしまったのかもしれない。でも、亡くなるから本当に大事なことに気づいた。それは相手がどんな状況でも気持ちを伝えることを怠ってはいけないということだ。

皆さんはどうだろうか。今、自分の気持ちを伝えているだろうか。仲の良い友だち。祖父や祖母。先生。そして、家族。一緒に住んでいるから、よく会うからといって勝手に気持ちや伝えていると勘違いをしていないだろうか。気持ちは言葉に表さなければわからない。いつも一緒にいるからこそ伝わらないことの方

が大きい。「言わなくてもわかるだろう」「面倒くさいから」「恥ずかしいから」「どうせ、私、僕の気持ちなんて」という言い訳を理由に気持ちを言葉にして伝えるということをおぼえていないだろうか。私はこの経験から伝えたい。気持ちを伝える大切さ。いつも身近にいる大切な人。いつ、いなくなるかはわからない。どれだけの感謝の気持ちを持っていったとしても、亡くなってしまえばもう遅い。だからこそ、常に相手に気持ちを伝えてほしい。「ありがと」。この一言だけではない。私と同じ思いをしてほしくないから。



悔をしなくても済むのではないかと思います。しかし、私は、悪口の他にも親に迷惑をかけています。例えば、度々起きてしまうケンカです。それは親の注意から始まります。黙って聞いていればいいのに、私はつい反抗的な態度をとってしまいます。それから言い合いが始まってしまふのです。数十分後、母が私に優しく語りかけてくれたのに嫌な態度をとってしまいます。落ち込んでいる母を見て「ああ、また言ってしまった」と、自己嫌悪になってしまいます。しかし、私より嫌な思いをして傷ついているのは母なのです。だから、いつも母に申し訳ないと思っています。そんな私にも母はいつも優しくしてくれています。例えば、私の家はいつも母が手料理を作ってくれます。私が久しぶりに外食に行きたいと言ったところ、母にダメと言われました。そのときもケンカになってしまいました。母に「あなたの健康を考えて、私が自分でご飯を作っているんだよ」と言う言われました。それを聞いた私は、母は私の健康を考えてダメと言ってくれたんだなとうれしく思いました。また、私はすごく悩んでいた時期があり、学校にもろくに行かず、

元気がありませんでした。そんな私に母は「一人で抱え込んでちやダメなんだよ。私はお母さんだから何でも話していいんだよ。一緒に悩んで一緒に解決しよう」と言ってくれました。それを聞いた私は涙が止まりませんでした。それから私は母に悩みごとを話すようになり、今ではしっかりと行っていきます。これも一番は母のおかげです。感謝してもしきれません。そのような経験から私が言えることは、子どもにとって親は必要不可欠な存在だということ。そんなことはもう分かっているという人もいるかもしれませんが、それ以上に大切な存在です。皆さんも親をもっと大事にしましょう。私たちが今ここでこの話を聞いていられるのも、一番は私たちが生んでここまで育ててくれて、安全に暮らせるよう守ってくれる親のおかげです。その感謝を忘れることなく、自分の親を大切にしていあげませんか。良い親子関係を築けるように…。

